

## ⑤ 改めて人の能力の拡張について考える

基  
般

■ 原島 博 ■

### 悩み

エンパワーメントをテーマとした原稿を依頼されて、いざその意義を記そうとして悩み始めてしまった。果たしてエンパワーメントは無条件でよいことなのだろうか。

エンパワーメントそれ自体は、人を力づけること、あるいは人の潜在能力を引き出して、人を「望ましく」することであり、そのための技術を開発することには、ほとんど問題ないことのように見える。むしろそれは素晴らしいことだろう。

一方で、筆者が悩んでいるのは、20世紀前半に世界的に大流行した優生学の思想を、筆者が完全には克服できていないからだ。

### 優生学

優生学 (eugenics) は、「生物の遺伝情報を改良する事で、人類の進歩を促そうとする科学的社会改良運動」(Wikipedia) とされている。

この優生学は1883年に英国のフランシス・ガルトン (Sir Francis Galton) によって提案された。その思想はガルトンの従兄弟であるチャールズ・ダーウィン (Charles Darwin) の進化論の影響を受けている。すなわち、人は進化するということを前提として、「家畜の品種改良と同じように、人間にも人為選択を適用すればより良い社会ができる」という基本理念がそこにある。1921年に開かれた第2回国際優生学会の標語は「優生学は人類進化の自己決定」であった。

優生学は、学となっているが実際は、国家単位で優生政策として進められた。その内容は次のように大別できる。

積極的優生学：社会的に「望ましい質」を持つ人が、より多く子孫を残すように奨励する。

消極的優生学：社会的に「望ましくない質」を持つ人が、子孫を残さないように措置する。

前者については結婚奨励や表彰、金銭的援助などがあるが、問題は後者であった。結婚制限だけでなく、産児制限 (避妊、中絶) や断種、望ましくない移民の制限、隔離、そして望ましくない人種の抹殺へと発展していく。

この優生学は20世紀に入って世界的に広がり、実は最も熱心だったのはアメリカだった。1907年から1923年の間に全米32州で断種法が制定され、知的障がい者、梅毒患者、性犯罪者などが対象となった。この動きにナチスが刺激されて、周知のようにドイツにおいて国家規模で優生政策が進められた。これが望ましくない民族 (ユダヤ人) の絶滅政策につながっていった。

### 新優生学

現在では、国家が主導する優生学は人種差別、障がい者差別をもたらすものとして、ほとんどの国で否定されている。当然と言えば当然であろう。ところがいまそれが新たな形で復活しつつある。それは国家主導の古典的優生学に対して新優生学と呼ばれている<sup>1)</sup>。その背景として遺伝子診断・操作技術の発展がある。

新優生学の特徴は次のとおりである。

- 1) 国家主導ではなく、個人 (特に親) の自由意思で行われる。その意味で新優生学はリベラル優生学とも呼ばれる。
- 2) 市場原理で、たとえば遺伝子ビジネスが推進している。その意味で消費者優生学、市場主義優生

学と呼ばれることもある。

3) 水面下でなし崩し的に広がっている。これを忍び足の優生学と呼ぶこともある<sup>1)</sup>。

この新優生学にも、積極的新優生学と消極的新優生学がある。親にとって「望ましくない」子が生まれないようにする消極的新優生学は、出生前診断すなわち胎児の段階で染色体異常診断を行って、必要に応じて中絶するという形で、広く行われている。

親にとって「望ましい」子を選択あるいはデザインする積極的新優生学も、水面下で進んでいる。たとえば、アメリカのある病院では、体外受精で得られた受精卵を遺伝子診断して、「望ましい」受精卵のみを母親の子宮に着床させる着床前診断が行われている。この病院では14年間で6,200人を対象にこれを行い、その8割が男女産み分けであると報告されている<sup>2)</sup>。

遺伝子才能検査ビジネスや、遺伝子バンクもある。かつて話題になったノーベル賞受賞者精子バンクは成功しなかったけれども、優秀な遺伝子を多数収集して、いわゆるビッグデータ解析で、知能を司る遺伝子が解明できれば、ビジネスにおける遺伝子の質の指標化が可能となる。

さらには、「望ましい」遺伝子を設計することも可能となりつつある。デザイナー・ベイビーと呼ばれるものがそれである。体外受精で、遺伝子診断だけでなく、遺伝子操作も行えば、「望ましい」遺伝子を持った子をデザインして産むことも夢ではない。

## 望ましい／望ましくない

新優生学は、親にとって「望ましい／望ましくない」子の産み分けを行うもので、原則として親の自由意思で行われる。子の幸せを祈って行われることも多いであろう。先にも述べたように、古典的優生学は現在では否定されている。この新優生学には問題はないのであろうか。

個人主義、自由主義の立場から問題ないとする人の方が多いかも。すなわち、古典的優生学

のように国家が強制することには問題があるけれども、個人（親）が自由意思で行うことには問題がない。「望ましい」子が生まれることを願うのは、個人（親）の幸福追求権であって、これを制限することは許されない。

一方で問題ありとする否定論あるいは慎重論もある。親が仮に「望ましい」と考えたとしても、その価値観を子に対して決定的に押しつけることは許されるだろうか。

次のような例が報告されている<sup>3)</sup>。アメリカの聾であることを誇りとしていた同性カップルが、子にもそれを誇りとしてほしいと願って、聾になる可能性の高い精子提供者を探し出して、実際に生まれながらにして聾の子を産んだ。子にとっては親の価値観（それが正しいとしても）を決定的に押しつけられたことになる。

さらには、そもそも人為的に遺伝子操作をして人類の進化に介入することは許されるのか。それは自然の進化論に反しているのではないかという反対論もある。

この論争は医療分野でエンハンスメント論争<sup>1)</sup>と呼ばれており、決着がついていない。これまで医療で行われてきた治療が、障がいを回復して正常に戻すことを目的としていたのに対して、エンハンスメント（能力増強）は、正常よりもさらに優れた能力・資質の獲得を目指す。特に遺伝子操作を伴うエンハンスメントは、子孫にまで影響する。それがいま問題になっている。

## 人のエンハンスメント

ここまでのところで読者は、この原稿に対して違和感を持たれたかもしれない。この特集で対象としているのは遺伝子の操作ではない。子孫を変えようとしているのではない。優生学あるいは新優生学を持ち出してエンパワーメントを論ずるのは、そもそも趣旨が違わないのか。

そうかもしれない。しかし一方で、子孫に影響しなければ、人間改造は無条件で許されるのか気にな

る。改造とまでいなくても、人の能力を増強することは、まったく問題ないのだろうか。そこにも何らかの線引きが必要なのではないか。

考えてみれば、産業革命以降の科学技術の営みは、一貫して人の能力を増強あるいは拡大するものであった。機械は手の能力、交通機関は足の能力、メディアは目や耳の能力、そしてコンピュータは脳の能力を拡大した。人をエンハンスメントする技術はこの延長上にある。エンハンスメントそれ自体の否定は、近代の科学技術そのものを否定することになってしまう。

もし違いがあるとすれば、これまでの科学技術は、道具によって人の能力を拡大するものであったのに対して、エンハンスメントは人そのものの能力の拡大を目指していることだろう。技術が次第に人の聖域に近づいてきたので、改めて問題となっているのである。

最近では、人工知能も話題になっている。このまま発展すると、30年後には人工知能は人の知性を超え、その後の発展は予測できなくなるとする説もある。それはシンギュラリティ<sup>4)</sup>と呼ばれている。そのようなとき人はどうあるべきか。人工知能を人の脳にアップロードするなどして、人そのものが「超人（スーパー・ヒューマンあるいはポスト・ヒューマン）」になって、さらにその上を目指すべきだとする主張もある<sup>4)</sup>。

## 能力拡張の是非

このような人の能力の拡張はどこまで許されるのであろうか。その線引きに関してある人はこう言うかもしれない。

まずは、治療はいいけれどもエンハンスメントはいけないと。しかし、治療の技術とエンハンスメントの技術に果たして違いがあるのだろうか。むしろ治療を目的として開発した技術のほとんどは、エンハンスメントにも容易に転用できると考えたほうが良い。そればかりか、治療よりもエンハンスメントの方がはるかに市場は大きい。たとえば電動義足や

電動義手の延長上に開発されたパワードスーツは介護の現場での活用が期待されているし、戦場では戦士の戦闘能力を格段に向上させる。

あるいはこのような線引きもあるかもしれない。身体に組み込む形でエンハンスメントをするのはいけないけれども、身体装着型でいつでも着脱可能にしておけば問題ない。これはもっともな線引きである。着脱可能型のエンハンスメントは、人体そのものに影響を及ぼすものではない。

しかし、仮に着脱可能であっても、それを装着した際は、それが心身一体となって機能することを理想とする。そうならなければいつまでも心理的に違和感が残るからだ。心身一体となっていつも身体に装着されているエンハンスメント装置は、次第にそれなしに人が生きてはいけなくなるのではないか。それを前提に人の環境になるシステムが作られ、もはや実質的には着脱不可能になるのではないか。そのような懸念が残る。

次のような議論もある。身体に直接かかわる技術は、安全性が保障されない限り実用化すべきではない。高度なエンハンスメントは高額になるから、恩恵を受けるのは富裕層のみで、深刻な格差を生みだすかもしれない。人の欲望は際限がないから、ひとたびエンハンスメントに染まると泥沼かもしれない。人は元々努力して能力向上を目指してきたのに、安易なエンハンスメントは、その努力を台無しにするからよくない。

## 価値観の見直し

このようにエンハンスメントにはさまざまな議論があるが、筆者にはエンハンスメント問題の本質は、それを推進する価値観にあるように思える。

その1つは、人を所有物とみなす価値観である。所有物だとすると、自らの意思で自由に改造してよいことになる。いま1つは、人はすべてを支配してよいとする価値観である。できることは思い通りに支配したくなる。その支配への欲求を当然の権利としてきたのが、近代という時代であった。

そして、ひたすら拡大・拡張を目指す価値観である。近代はそれを進歩とみなしてきた。競争の時代には、拡大・拡張を目指すことはいわば必須であった。経済も成長を前提としている。

もしかしたら、エンハンスメントの是非は、このような価値観の再点検を行わなければ結論がでないのかもしれない。

本当に人は所有物なのか。所有物であれば、自らをどう作り変えようと、個人の自由である。子をどうデザインしようと親の自由である。自殺によって自分を捨てることも、中絶などによって子を捨てることも自由になる。

本当に人はすべてを支配してよいのか。近代はその支配のための強力な武器として、科学技術を手に入れた。そして近代はひたすら拡大・拡張を目指し、人の価値も数値で評価するようになった。

これらの疑問に対して、筆者は最近次のように思うようになってきた。人は所有物ではなくて、本来は「授かりもの」、「預かりもの」なのではないか。すべてを支配してよいとするのは、人の傲慢なのではないか。むしろ「謙虚さ」、「寛大さ」が必要なのではないか。拡大・拡張の時代はもはや終わろうとしている。これからは「等身大」、「ありのまま」がいいのではないか。

「授かりもの」、「預かりもの」、「謙虚さ」、「寛大さ」、「等身大」、「ありのまま」……、このような価値観に立ち返ることによって、弱者（望ましくないとされた人）への共感や連帯が生まれる。自分自身が愛おしい大切な存在となる。感謝の気持ちが生まれる。

これは筆者だけの考えではない。たとえば「ハーバード白熱教室」で有名なマイケル・サンデル

(Michael J. Sandel) の『完全な人間を目指さなくてもよい理由』<sup>3)</sup>においても、同様の考え方が示されている。筆者もその影響を受けている。

## 再び悩み

ここではエンハンスメントについて最近考えていることを述べてきたが、筆者はまだ悩んでいる。このような考え方は、どこまで現代社会において説得力を持つのであろうか。数ある考え方の1つとして相対化され、そう思うのも思わないのも個人の自由として扱われてしまうのであろうか。時代の多くの人が「所有」、「支配」、「拡大」を価値観としている限り、科学技術はそこを目指し、エンハンスメントは止まらないであろう。

それが人類の勝利を意味するのか、自滅を意味するのかは筆者には分からない。願わくば、エンパワメントが自滅へ向けたエンハンスメントではないことを祈って、悩みながらのこの原稿の筆を置くことにしたい。

### 参考文献

- 1) 上田昌文、渡部麻衣子(編):エンハンスメント論争—身体・精神の増強と先端科学技術, 社会評論社(2008).
- 2) 行方史郎:IQは金で買えるのか—世界遺伝子研究最前線, 朝日新聞出版(2015).
- 3) マイケル・サンデル:完全な人間を目指さなくてもよい理由—遺伝子操作とエンハンスメントの倫理—, ナカニシヤ出版(2010).
- 4) レイ・カーツワイル:ポスト・ヒューマン誕生—コンピュータが人類の知性を超えるとき, NHK出版(2007).  
(2016年10月25日受付)

■原島 博 hirohrsm@sepia.ocn.ne.jp

2009年東京大学を定年退職。現在東京大学名誉教授。人のコミュニケーションを技術的にサポートする研究に従事。